

# 異文化交流とオルタナティブなコミュニケーション回路の構築

——「ローカルの不思議」プロジェクト

崔銀姫（北海道東海大学国際文化学部専任講師）

北村順生（新潟大学人文学部助教授）

坂田邦子（東北大学大学院情報科学研究科講師）

小川明子（愛知淑徳大学現代社会学部専任講師）

茂木一司（群馬大学教育学部助教授）

## 1. はじめに

我々は「他者」(1)をどのように理解しているのか？ 現代のメディア社会の中では、「他者」に対する理解の多くがマスメディアにより表象された画一的なイメージの影響を強く受けているといえる。例えば、アジアの国々や地域に関するイメージの多くは日本からの視点によって描かれたものであり、そこではステレオタイプによる偏向したアジア・イメージの消費が繰り返されてきた。同様の問題は、国内の地方文化の表象においても見出される。現在の日本のメディア環境においては、マスメディアは東京一極に集中した構造をもつため、地方文化はもともと表象されることが少ないうえに、東京からの視点に強く影響を受けた一面的なものに陥りがちである。一方で、地方から直接自文化について全国に向けて発信する機会や手段は極端に少なく、地域間の水平的なコミュニケーションが極めて難しい。

こうした状況を克服するための試みとして、本研究では情報メディアを身近な情報媒体として使いこなし、自らが居住する地域の文化について発信していく実践を試行する。このようなメディア実践を通じて、マスメディアのステレオタイプの表象を批判的に読み取り、オルタナティブな地域間のコミュニケーション回路を構築して、草の根的な地域間文化交流の実現を模索する。そして、その可能性と課題について探求することが目的である。その目的を具体的にいうとまず、マスメディアの表象を批

判的に読み解き、それをメディアの構造的な問題と結びつけて捉えること、また、自らが属する地域文化についての理解を深め、特定のメディア表現を用いて他の地域に向けて情報発信していくということが挙げられる。これらの能力は、メディア論や情報教育等の分野において「メディア・リテラシー」として捉えられてきたものであり、この能力を涵養するための具体的事例として位置づけられる。一方で、異なる地域の異なる文化間における相互理解という面からすると、異文化コミュニケーション研究としても捉えることができる。また、既存のマスメディアに対抗する草の根的でオルタナティブなコミュニケーション回路の構築という面では、新たなメディア・システムの模索というメディア論上の課題とも結びついているといえる。

本稿では、異文化理解とメディア・リテラシーとを交差させた新しいアプローチの実践研究の一環として行ってきた学習カリキュラム「アジアの不思議」を紹介したい。筆者は、現状を改善するための一方策として、地域間における異文化理解とメディア理解とを進めていくカリキュラム「アジアの不思議：ローカル版」を構築し、修正を加えながらパイロット実践・研究として、主に高校、大学で行ってきた。この実践は、地域間を結ぶ直接的な文化交流の可能性と課題について明らかにすることを目指した、メディア実践研究である。こうした地域間文化交流の実践により、マスメディアにより繰り返される地域に関するステレオタイプの表象がどのように克服され、オルタナティブなコミュニケーション手段としてどのような可能性をもっているのか、また、そこにはどのようなメディア・リテラシー学習が可能であるのかという点を検討したい。

## 2. 「アジアの不思議：ローカル版」カリキュラムの概観

### 2-1. 実践の概要

「アジアの不思議：ローカル版」は、2003年度には愛知淑徳大学と新潟大学の2大学間で、2004年度にはこれに北海道東海大学と群馬大学を加えた4大学の間で実施された。

実践の内容は、概ね、地域イメージマップ作成、地域に関するクイズ映像制作、メディアを用いた地域（大学）間交流を行うことである。具体的には、最初に参加者たちはそれぞれの地域に関するイメージ、主に、時事問題、自然地理、歴史文化、生活・習慣の4つの視点からイメージマップを作成し、交換した。この作業を通じて、参加者たちは自文化に対する他地域における理解のギャップを認識するとともに、そのイメージの情報源も振り返ることでローカルイメージの形成におけるマスメディアの役割の大きさについて理解した。次に、各々の地域で自文化に関するクイズ形式の短い映像を制作した。ここでは、先に作成したイメージマップを念頭に、マスメディ

ア等では伝わっていない、しかし伝えたいと思うそれぞれの地域の文化について映像によって表現した。そして最後には、制作した映像の交換をもとに、各地域の参加者がインターネット等の手段を用いて交流を行った。この段階で初めて、地域の参加者たちは直接コミュニケーションを行うことになる。以上の一連のカリキュラムは、基本的には国際版(2)の「アジアの不思議」をそのまま地域間交流へと応用したものである。

## 2-2. 「ローカルの不思議」プロジェクトの経緯と内容

### ■2003年度（新潟大学－愛知淑徳大学）

新潟大学	愛知淑徳大学
授業科目：「情報メディア論特殊研究1」	授業科目：「演習1a」
学生数：30名（2年生以上、大学院生を含む）	学生数：18名（3年生）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 9/29 講義、ワークショップ、ディスカッション</li> <li>・ 9/30 企画・構成・撮影</li> <li>・ 10/1 撮影</li> <li>・ 10/2 編集</li> <li>・ 10/3 オンライン交流、まとめ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5/16ー ワークショップ、ディスカッション（都市イメージについて）</li> <li>・ 5/30 テーマ案についてのプレゼン1、討議</li> <li>・ 6/6 テーマ案についてのプレゼン2</li> <li>・ 6/20 イメージマップの作成他</li> <li>・ 夏休み ビデオ制作</li> <li>・ 10/3 オンライン交流、まとめ</li> </ul>
作品テーマ：焼きそばスパゲティ「イタリアン」、新潟は何地方？ 米製品いろいろ、冬の寒さと電車の手動扉、拉致問題と新潟	作品テーマ：路上駐車問題、万博問題、下町と名古屋弁、リサイクルショップと名古屋の堅実性、夏に暑い名古屋

## ■2004 年度（北海道東海大学—群馬大学—新潟大学—愛知淑徳大学）

北海道東海大学	新潟大学
科目名：「メディアリテラシー1」	授業科目：「情報メディア論演習 1」「基礎」
学生数：1～2年生の26名	学生数：10名（2年生8名3年生、大学院生）
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4月～5/11 異文化コミュニケーション基礎</li> <li>・ 5/18 イメージマップ作成1</li> <li>・ 5/25 イメージマップ作成2</li> <li>・ 6/1 企画案作成、構成</li> <li>・ 6/8～15 撮影</li> <li>・ 6/22 編集</li> <li>・ 6/29 感想交換・反省会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5/28 イメージマップ作成1</li> <li>・ 6/11 イメージマップ作成2</li> <li>・ 6/18 企画、構成</li> <li>・ 6/25 撮影</li> <li>・ 7/9 編集</li> </ul>
作品テーマ：TV塔、大通公園、札幌ドーム、白い恋人	作品テーマ：焼きそばスパゲティ「イタリアン」、カキノモト、新潟一の建物、ポッポ焼き、越後屋と三越

愛知淑徳大学	群馬大学
授業科目：「演習a」「基礎演習」	授業科目：「美術科教育実践研究2」
学生数：16名+12名	学生数：2名（大学院生1名、研究生1名） 学部生10名がイメージマップ制作
<ul style="list-style-type: none"> <li>5月上旬 購読+ディスカッション</li> <li>5月下旬 イメージマップ作成</li> <li>6月上旬 テーマ案について討論</li> <li>6月中旬 テーマ案決定</li> <li>6月下旬（ゼミ以外で）撮影、編集</li> </ul>	合計10時間（5日）
作品テーマ：現代名古屋弁、金シャチの秘密、ナナちゃん人形、味噌商品いろいろ、名古屋嬢今昔	作品テーマ：群馬の名所、こんにゃくいも、上毛カルタ、群馬はどこ？

### 2-3. 多様なメディアを利用した遠隔多地域間コミュニケーション

「イメージマップ」とは、実践に参加する各自が持っている相手イメージを書き出し、相手が自分の地域に対して持っているイメージを認識する一種のしかけである。その作成の詳細は、まず、各自が頭の中にあるイメージを文字で書き出す。その際、そのイメージを得たメディアが何だったかを思い出して、マスメディアから得たものには赤色で、教科書の場合はピンク色で、旅行誌やインターネットなどのメディアは緑色、個人的な体験やコミュニケーションから来たものには青色で書きこみ、識別させる。なお、誰かが書き込んだイメージに同調する場合は、イメージを得たメディアの色で文字を囲む。

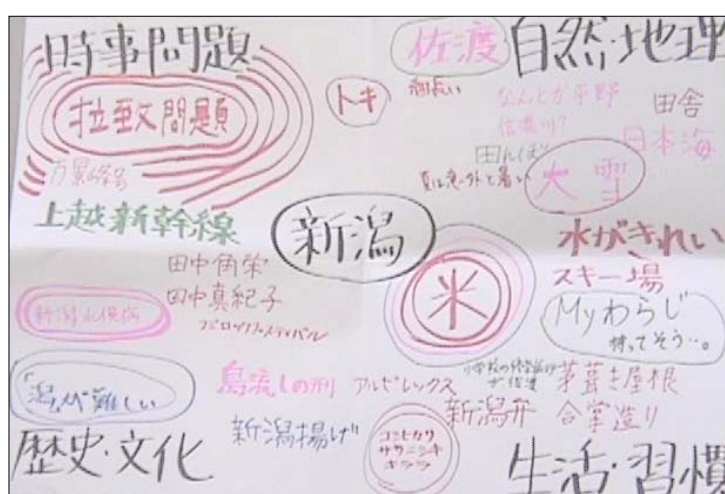


図1 イメージマップの例

オルタナティブなメディアの発信としての遠隔地コミュニケーション実践の最終的な段階である「交流」の方法は、1) 各大学の制作したビデオを事前に送付し、全員で映像のクイズ問題を視聴しながら回答する 2) その際、相手に聞いてみたい質問や鑑賞感想をメモしておく 3) その後チャット、テレビ電話などのメディアを用いて他地域の相手と交流する、ことである。

ちなみに、2003年度はチャットルームを開設し、オンラインチャットでクイズ制作をしたグループごとに時間を決めて交流を行った。この交流方法の問題点としては、チャットそのものが初めてという学生が多く、キーボード入力能力の差が発言の差に直結したことが挙げられる。また、「顔が見えない」ことから、男性／女性などの区別も難しく、どんな相手とコミュニケーションしているのかがわからないという戸惑いが生じた。

2004年度は、前年度の反省を含め、今年度は「ドコモ FOMA」を利用したビデオカメラ携帯電話4台（各大学1台）を用いた「テレビ電話」で交流を行った。この実践方法は、「テレビ電話」という新しいメディアを用いたことで非常に動機付けが高

くなり、参加者の感動を刺激したことや典型的な地域理解を助ける映像コミュニケーションが可能であった反面、かえって参加者が緊張することで十分なコミュニケーションが出来ず、不自然な演出も出てきたことが指摘された。

### 3. プロジェクトの意義と課題

この授業実践においては、メディア・リテラシーと異文化理解という大きく2つの分野について学んでいくことを狙いとした。これらの観点から、このプロジェクトのもつ意義や可能性として主に次の点があげられる。

まず映像制作を実際に体験することの重要性である。圧倒的な量の映像が流通する現在のメディア状況の中で、自らカメラを手に取り、編集を施して映像表現を試みることの意義は大変大きい。映像の送り手としての体験を通して、映像メディアの持つ特性や限界を体で理解することで、日常的にテレビなどの映像メディアに接する際にも分析的な視点を養うことができるであろう。

この場合、クイズ映像という形式や、他地域の人に自文化について表現するという目的の明確さが重要な意味を持っている。この種の制作実習では、その目的が明確化されていないと、時に制作そのものが自己目的化してしまい、表現手法の洗練にばかり関心がいつて中身が希薄化してしまう場合が多い。具体的に受け手を意識させ、クイズの形で自文化について伝えるという目標を設定することで、表現上でもより分かりやすいものを作ろうという動機付けとなるし、自身と他者の文化との境界に意識的になり、自文化のことをより深く考えるきっかけともなっていく。

さらに、これらの「伝える」ための意識を伴った作業を通じて、自分たちの表現とマスメディアの表現とを比較考察することで、異文化コミュニケーションにおけるメディアの役割と限界についての理解を深めていく可能性がある。そして、オルタナティブなコミュニケーション回路の可能性である。日常生活の中でマスメディアに充足している場合には、オルタナティブなメディアの必要性についてとくに意識することは少ない。しかし、実践を通じて身近な題材の中でマスメディアの限界を感じることで、マスメディアとは異なるコミュニケーション回路の意義を考えることができた。

一方、この実践を進めていく上で注意すべき問題点や今後考えていかなければならない課題としては、以下のような点があげられる。

まず、参加者に対してカリキュラムの一貫した目標を意識付けるようにすることである。このカリキュラムは複数の作業段階から構成されているため、ややもすると参加者は各々の段階が全体の中でどのような位置づけにあるのかを見失いがちである。実践全体の目標と、その中で各プロセスの位置づけを明確にする必要がある。

また、これが単なるパイロット的な研究・実践にとどまるのではなく、継続的に実

施され、多くの学校や組織が参加できるような環境を整備していく必要がある。その一つが、このプロジェクトに関するアーカイブの整備である。過去の実践参加者や将来的な参加希望者等のデータベースが充実し、過去の実践結果なども蓄積・公開されていくなれば、それぞれの学校や組織が実践の交流先を見つけるのに大いに役立つであろう。うまく機能すれば、お互いの交流目的に応じた提携先を容易に見出せることにより、様々な交流の形態や内容のバリエーションが生まれることも期待される。例えば、同じ自文化の表象であっても、隣県の地域を対象にするのとより遠く地域を対象にするのでは、表象の仕方や内容に少しずつズレが生じてくるであろう。その結果、自文化に対する複眼的で豊かな自己認識を持つことが、そのような交流の広がりの中から生じてくる可能性もあるのだ。

そして、最後の交流の際に活用できるインフラや設備の整備も今後の課題として残されている。ただし、インターネットの発展により、現状でも何らかの形で交流の実現は可能な状況となっている。逆に言えば、どのような形の交流をどのようなメディアを用いて行なっていくのかを模索していくこと自体が、メディア特性を学ぶ貴重な機会になっていると言うこともできる。

これらの課題を徐々に克服し、実践の輪を拡大しながら回数を積み重ねていくことによって、「メディア・リテラシー」に関する輪郭がより深いものとなっていくであろう。

[日本教育メディア学会誌『教育メディア研究』11巻2号投稿論文を改訂]

注：

- (1) リップマンの「擬似環境概念」。メディア多様化のなかでの人間の環境認識を「個人の環境イメージとしての擬似環境」と「他者の環境イメージとしての擬似環境」で分析している。
- (2) 2001年、『アジアの不思議』プロジェクトの国際パイロット実践。韓国と日本の高校生参加。

参考文献：

Lippmann, W., PUBLIC OPINION. New York, Harcourt Brace and Co., 1992